

## 「未来の教室」を知る～ 教育総合展講演会報告

図書情報部 主任 今中 俊久

2020年9月17日（木）千葉県千葉市の幕張メッセで行われていた教育総合展で、4つの講演を受講した。その中でもとりわけ印象に残った講演について、その内容を記載する。

Covid-19の世界的流行をきっかけに世界も日本も、日本の教育界も、そして本校も、イノベーション（技術革新）を含めた大きな変革を迫られているといえる。この講演の内容が、本校の教職員の皆様にも、保護者をはじめとする関係者の皆様にも、そして何より、本校の中で多感な青年期を送り成長を遂げて未来の世界を担う生徒の皆様にも、大いなる学びの契機となると確信している。拙い文で恐縮だが、読み進んで頂ければ幸いである。

3年目を迎えた「注1 未来の教室」の今後 教育イノベーション政策の現在地点

～with/after コロナにおける未来の教室とは～

講師：経済産業省商務・サービスグループ サービス政策課長兼教育産業室長 浅野 大介氏

（注1：「未来の教室」とは…経済産業省の実証事業に基づき、3つの柱（学びのSTEAM化・学びの自立化・個別最適化・新しい学習基盤作り）の実現を通して目指していく、新しい学習の場）

参照：<http://www.learning-innovation.go.jp/verify-list/>

講演の中で浅野氏は、注2 GIGA スクール構想の社会的意義について言及された。

GIGAスクール構想は、文部科学省が中心となって行っている事業だが、その目的には産業界や大学をはじめとする研究機関も大きく関わっている。つまり、「未来の人材」を輩出する事業でもある。

高校を卒業する段階で、「生徒一人一人は自分自身の社会への関わり合いをある程度確立しておく必要がある。そのためには、「社会の課題を学び、「今の世界ってなに？」という疑問が（知識としてではなくある程度の経験知に基づき）各個人に内在する必要がある。それを可能にするために、「一人一台端末とそれを有効に活用するための高速ネットワーク環境の整備は喫緊の課題である」という趣旨の話であったと私は理解している。

（注2：GIGAスクール構想とは…小中学生のために一人一台端末と高速ネットワーク環境などを整備する文科省の計画。当初は2019年度から2023年度の5か年計画とされたが、2020年4月に、2020年度までの2か年計画へと3年前倒しされ、約2200億円の追加予算措置が取られた）

また、浅野氏は「学びの個別最適化」と「STEAM・学びのSTEAM化」の意味とそれらの関連性について言及された。

すべての子供たちが何らかの価値をもたらす人に育つためには、「誰一人取り残さない（None Left Behind）、注3 留め置かない」学習機会が必要である。一人一人の児童生徒が自分のペースを作る学び、居場所や学年や時間の制約を必ずしも授けず、自分の個人目標と選択をもとに学ぶ「個別最適化された」学びを実現するための方策として、新学習指導要領でも「よりよい社会と幸福な人生の造り手を育む学びに向けたカリキュラムマネジメントの必要性」は重要視されており、それを克服した上での「注4 STEAM」や「注5 学びのSTEAM化」はこれからの教育の鍵を握る学習法であるとされている。

（注3：ここでの「留め置かない」とは…集団教育の中で周りの人間の習熟のために自分が習熟をある程度終えていても次の段階に進めず、より深い理解をする機会を持つことが出来ず、文字通り「留め置かれ」た状態を作らないことをいう。）

(注4：STEAMとは…Science, Technology, Engineering, Art, Mathematicsの頭文字をとった名称。様々な分野の教育を横断的に学び、それらを応用し、想像力や創造的な方法によって問題解決をはかることができる人材育成に力を入れる教育方針。AIが不得手としているクリエイティブな能力にチャレンジできる能力を育てられる学びとして、文科省や経産省が推進している。) 参照 <https://miraii.jp/stem/3>

(注5：学びのSTEAM化とは…教科学習や総合的な学習の時間、特別活動も含めたカリキュラムマネジメントを通じ、一人ひとりのワクワクする感覚を呼び覚まし、文理を問わず教科知識や専門知識を習得する(=「知る」)ことと、探究・プロジェクト型学習(PBL)の中で知識に横串を刺し、創造的・論理的に思考し、未知の課題やその解決策を見出す(=「創る」)ことが循環する学びを実現することである。参照 [https://www.meti.go.jp/shingikai/mono\\_info\\_service/mirai\\_kyoshitsu/pdf/20190625\\_report.pdf](https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/mirai_kyoshitsu/pdf/20190625_report.pdf))

これらの実践にはいくつかの課題がある。現行カリキュラムにおける「標準授業時数」を、時間管理型学習から個別最適化学習をもとにしたものに改めること、教員免許・採用・研修の一体改革、教科書のデジタル化(単なるPDF化ではなく、教科書内容を真にデジタル化する)などである。このうち、標準授業時数問題に関しては、一人一台端末の実現と注6 EdTechで個別最適化を実現(「自立学習」)する中で生み出された時間数を、探究型・文理融合型学習に再編していく道を示している。

(注6：EdTechとはEducation(教育)とTechnology(テクノロジー)を合わせた造語。教育分野における既存の常識を覆し進化させうる技術として期待されている)

さらに浅野氏は、リアルな社会課題や近未来テーマを研究する「学びのSTEAM化」の実践例を数例挙げて説明した。

詳細について興味がある方は「未来の教室」(<http://www.learning-innovation.go.jp/verify-list/>)を参照されたい。また、10月上旬にはSTEAMライブラリーを開設する予定であることも説明された。

以上が本講演の概略である。45分という時間の中で大変多くの情報が提示されたため、書き写すこともままならず、残念なことに省略せざるを得なかった箇所もあるが、大体的内容は説明できたのではないかと思う。

最後に、本講演に対する筆者の考えを多少なりとも記述しておく。

本講演で説明のあった文科省の「新学習指導要領」「GIGAスクール構想」及びそれを支援する形で行われている「未来の教室プロジェクト」は、いずれも現在の日本が国際社会の中で置かれている斜陽的状況の克服を目的としている面があるのは確かであろう。教育の目的を「未来の人材の輩出」としていることからそれは明らかである。

一方で、これらの動きが教育を「子どもたちすべてを小さな企業家にする教育」と批判するむきがあるのもまた事実である。人材輩出を目的とした教育は教育にあらず、教育の本分は知識の伝達と教養の涵養にありとする考えであるかとも思える。確かに、それらの動きを実践する側の学校側に、「社会に有用な人材を輩出すること」を標榜する傾向があるのも事実であろう。

しかしそのことが、これらの動きが教育を人材の輩出のみと位置づけることと断定することには決してならないと私は考える。「個別最適化」にある「誰一人取り残さず、誰一人留め置かない」という考えは、経済界の要請に基づくものではなく本来の教育のあり方であると感じる。またそうでなければ到底継続し得るものではないほど困難を伴うものであると現場の教員として感じる。さらに言うなら、「学びのSTEAM化」を通じて、私が実践の中で感じる生徒達の「ワクワク」感は、「人材輩出」の副産物ではな

く、まさに教育そのものがもつ「知ること」の楽しみゆえのものであり、彼らのワクワク感はオトナの思惑など軽々と飛び越えるだけのエネルギーを持つものであると実感している。

もっと私たちは児童生徒たちの力を信じるべきではないか。教育現場に立つ一人の教員としての観点から、生徒への祈りを込めて、これらのプロジェクトに関わる価値はあると感じる。このプロジェクトを真に生徒にとって価値のあるものにする使命が、私たち教員には課せられているものだと考える。